



Title	島のゴミ問題解決のための新たなスタイル
Author(s)	敷田, 麻実
Citation	しま, 50(2), 37-41
Issue Date	2004-09-16
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/34974">http://hdl.handle.net/2115/34974</a>
Type	article
File Information	1371.pdf



[Instructions for use](#)

# 島のゴミ問題 解決のための新たなスタイル

日本沿岸を汚染し、深刻度を増している漂着ゴミの問題。これは必ずしも島に限った問題ではない。漂着ゴミを離島固有の問題とするのではなく、本土の人たちと連携・協働しつつ解決策を探っていくにはどうすればよいのか——沿岸域管理学、エコシステムマネジメントの専門家が提言する。

金沢工業大学 教授 敷田麻実

## 島との出会い

漂着ゴミが日本の沿岸域を汚染し、深刻な問題になっていることは、JEAN(クリーンアップ全国事務局)はじめ、さまざまな関係者の努力によって伝えられてきた。そして単にゴミを清掃するだけでなく、その解決に何らかのアクションが必要だということも、社会的に理解されるようになってきた。筆者は漂着ゴミ問題にかかわる一人として、この問題の深刻さを訴えることよりも、解決策を具体化することの方が重要だという立場から、特に島のゴミ問題解決に関していくつか提案したい。

さて、この問題に関して論ずる前に、私と島の「かかわり」について説明しておきたい。かつては水産行政の仕事、最近では沿岸域に関する研究を仕事としていた関係で、私は島について見聞きしたり、訪問する機会

は多い。たとえ仕事でも、島を訪ね、ゆったりと流れる時間や島の人々の暮らしに接すると、人が離島やそこでの生活にあこがれて島を訪ねる気持ちがかかる。そして短い時間だが、非日常の世界に触れることで、自分のふだんの生活を見直すこともできる。

その中でも特に、妹が一九九二年にお世話になった瀬戸内海の魚島は、印象に残っている。魚島は瀬戸内海のほぼ中央の燧灘ひらたなにある周囲七kmほどの離島で、三〇〇人あまりの島民が漁業とミカン栽培で生計を立てている。

妹は、JYVA(社団法人日本青年奉仕協会)のボランティアとして一年間魚島に滞在し、島の人々とかかわるさまざまな活動に参加していた。もちろん、島のことをお手伝いするより、彼女が学ぶことが多かったと思う。私も妹の滞在中に魚島を訪ねたが、島独特の生活空間の広がりや、そこで暮らす島びとと

仕事で島に移り住んでいる教員や、妹のようにボランティアとのかかわりを垣間見ることができた。島外からやって来るこうした「よそ者」に島の機能のいくつかを支えてもらいながらも、島の基軸となる漁業などは島の人々が動かしている。

よそ者との「かかわり」ということでは、一九九四〜九五にかけて調査のためにほぼ毎月訪れた石川県の船倉島ふねくらじまが面白かった。この島に住むのはほとんど漁業者だが、春秋の野鳥の渡りのシーズンになると大勢のバードウォッチャーが珍鳥をめぐって来訪し、一転よそ者たちでにぎわう。

バードウォッチャーたちは食事や宿泊を通して島の地域経済に貢献しているが、島の営みとその活動は直接つながってはいない。同じよそ者でも、通過客にしか過ぎない彼らと、魚島のようにある程度定住するよそ者では、活動やかかわりの度合いに大きな違いがある。

## 島のゴミ問題解決へのステップ

「ごまごま島で二口に言っているが、もちろん、石垣島や宮古島のように何万人もが住む島から、魚島や石川県の船倉島のように小規模な島まで、島のサイズや定住人口の差は大きく、それがそのまま置かれた条件の差にもなっている。だから離島を同列に並べて論ずることは難しい。



しかし、「離島」と呼ばれる土地が抱える悩みや課題が不思議と共通していることは、この冊子「しま」を何冊か手にしてみればよくわかる。そのひとつがこの連載で取り上げられている「漂着ゴミ」の問題だ。離島だからゴミを抱え込まなければならないという問題は、最も

近、国内の多くの島の民を悩ませている。しかし、それが島特有の問題であり、島外からの支援を受けなければ解決できると考えるのは安易ではなからうか。

そこで、漂着ゴミ問題を島だけの「特殊」な問題と捉えることなく、問題の共通性を共有することで、島のゴミ問題への示唆を見出し出しているどうか。漂着ゴミ問題を島に特殊な問題だと断じれば、得られる共感や支援も多いと思いが、そのようなアプローチでは、支援される者で支援する者の差は克服できない。また、島の漂着ゴミという、どうしようもない問題を抱えた地域に対して、この問題に関しては加害者でもあり、少しは恵まれている「本土」の人々が、贖罪から慈悲を持って「助け」てあげる「という関係は、そう長続きはしない。本当に必要なことは、当事者意識を持って島のゴミ問題の解決にあたる仲間を増やすことであり、島の持つハンディキャップに対する島外

からの理解を得ることではないだろうか。

そのため、単純に島のゴミ問題を解決しようという呼びかけだけでは、もう十分ではない。これからは、この問題を島以外の関係者と協働しながらどのように解決できるのか、島と島以外の住民で、どうやって問題を共有すればいいのかなど、新たな解決策が望まれている。

## 島のゴミ問題としての取り上げられるからには、漂着するゴミの問題は、島だけに起こりがちな特殊な問題という面が確かにある。例えば、せつかくゴミを回収しても、小さな島では島内で処分しようがなく、高いコストをかけて島外の処分場に輸送しなければならぬ。また海岸漂着ゴミの回収には手間暇がかかり、通常はそのためにボランティアを募るが、人口が相対的に少ない島では大勢の協力は

得にくい。このように考えると、島のゴミ問題がいかに特殊かという答えにたどり着くしかないように思えるが、果たしてそうだろうか。

実は、大勢の日本人が住む本土と呼ばれる地域と島には、似ている点がある。確かに私たちが、島に比べて面積が広い土地の上に住んでいる。しかしよく考えてみれば、地域というのは、他の地域という「海」に浮かぶ島のようなものではないだろうか。つまり地域「コミュニティ」をひとつの島と見立てれば、それは他の地域という「海」に囲まれた、まさに「島」だろう。このように捉えると、本土にある地域も島と本質的には変わりがない。もちろん、島が海によって物理的に隔てられているという事実を否定しているのではない。しかし「差があること」の強調は、本土に暮らす人と島に住む人々の立場を「ごまごま島」なるものとして際立たせるだけで、問題の共有や本質的な解

決はとってプラスにならない。このように考えれば、本土の地域「コミュニティ」でも、ゴミをコミュニティ外の処分場に出す時は抵抗を受けるし、小規模なコミュニティだけで解決しようとしても、ゴミ問題はいつまでもさつまいかないことは、島とさして変わりがないことに気づく。島はそのような制約が自然条件の面で厳しい場所にすぎない。だから漂着ゴミの解決が島で進められるのならば、本土でもそれを進められるに違いない。もっと大胆に言えば、本土の地域とそこに住む人々こそ、島の「ゴミ対策から学ばなければいけないのだらう。本土や海外から漂着したゴミによって「ひどい目に遭っている」のは島なので、義務として支援するといふ隣国型ではいけない。島を進められることから学ぶ必要があるから積極的にかわるといつ、島「ゴミ問題解決への協働が望ましい。そこから、さまざまな解決策が見い出されるに違いない。

逆に島の側も、本土で進められている周囲のコミュニティとの連携や協働が、漂着ゴミ問題の解決にとって重要なことを理解できる。昨年、飛鳥で始まった「離島リサミット」は、そのような連携の場として期待したい。そして島の関係者だけが集うのではなく、島や本土というこだわりを超えて、漂着ゴミ問題を考える場にできないだろうか。そこに島の人々と本土の人々が協働できる力がある。島の特殊性を強く主張するより、そこで解決策が、本土のお手本となることを意識して進めることが必要だ。

## 自律的な依存」を

さて、もう一つ重要なことは、地域「コミュニティ」や島という、いわば限定された地域や空間での解決策にこだわってはいけないということだ。地域のことはいかにかわからないと言いきってしまえばそれまでだが、

「よそ」から見ると、こそこわること逆だ。よく傍目八目と言われるが、そのような「よそ者」の立場や視点を、島でもフルに活かしてはどうだろうか。特に漂着ゴミ問題のように、島だけで悩んでいるでも解決できないケースでは、むしろよそ者の持つ知恵を積極的に活用し、そこから解決策を見い出すことが肝要だ。

もちろんよそ者が地域にかかわることは、いつでも気持ちのよいものではなく、よそ者に地域を乱されたり、ルールを無視される危険もある。だから一方的に島を開放するという話ではない、節度を持って開くことが重要だし、「曖昧な節度」よりも、よそ者にもわかる島のルールを作る方がよい。



また、そのためには上手な「よそ者使い」が求められる。それには、単によそ者をおだてればよいのではなく、よそ者に「一肌脱いでやろう」と思わせ

とも多い。島でなくともこのような海岸清掃行事は多いが、それがイベントのような一過性の行事に終わることは問題がある。

イベントによって大勢の人が島を訪れば、一時的なごみは起り、見た目には華々しい成果が上がったように思えるが、実はコストも大きい。目に見えるコストに加え、そのイベントを実施するために他の島の行事や活動が影響を受けるといふことであれば、そのコストも考えなければならない。漂着コ



ミを単に清掃するだけでは、清掃コストが増え続け、その負担は当事者である島民が負担することになってしまう。ただし、イベント自体を否定しているのではない。効果的に進めることを考えてはどうだろうかという提案だ。そのためにはまず、こうした一過性の行事を連続したものにして、その運営に責任を持つ必要がある。続けるには工夫がいるし、経営を考えるならば、無茶な「一回きり」のイベントはできない。

実は、これがコミュニティビジネスの第一歩になる。ビジネスと言っても、身近にある行事や仕事をいかに採算をとるかをまず考えることだ。それができれば、コミュニティで興すビジネスの基本がわかってくる。だからイベントのコストとメリットを考えるという単純なことか

ら出発しよう。こうした「経営感覚」を身につけることで、「補助金が出てくるからいいや」とか、「とりあえず関心を持ってもらえばいい」という「甘い考え」が通じないこともわかってくる。そうすれば、島でイベントをすることは是非も冷静に見ることができるようになる。これができるなら、「ゴミに関するイベントだけではなく、「島おこし」イベントのコストとメリットも考えられるようになるのではないか。

### 「コストとメリット」の比較を

最後に、島のゴミ問題解決の際に考えなければならない重要な視点、コストとメリットに関して述べたい。島の環境を保全するためには、コスト度外視でという意見もあるかもしれないが、たとえ島の環境が素晴らしく良くなったとしても、住む人々が清掃のためにへとへとになったり、福祉や過疎対策など島の他の重要課題が放置されては、長続きはしない。だからこそこの問題はきちんと考えておきたい。

漂着ゴミ問題の解決に関して、島の内外の関心を高め、協力も得ようとイベントが行われるこ

る仕掛けがある。それは一時的な仕掛けというより、解決のための持続可能な「仕組み」だ。そのような仕組みづくりこそ、島民側が心がけなければいけないことで、「ゴミ問題で島民以外と対等に協働するための第一歩」などの実施から、島の住民とよそ者がそれを協働企画するように発展させるなどの工夫が考えられる。

もちろん一番望ましいのは、ゴミ問題解決から島に雇用や仕事が生み出せることで、そのためには即物的な解決ではなく、一段レベルの高い問題解決案の提案が必要になる。

「ゴミの清掃だけで終わらず、地域で海岸管理をすることで、鳴き砂の浜を保全しながらうまく活用している京都府網野町

(現在の京丹後市)にある琴引浜の例は、この点で高く評価できるだろう。ここでは、鳴き砂の専門家をはじめとするさまざまな「よそ者」とうまく協働しながら、地域で仕事を創り出している。またその活動自体が地域を活性化させている。例えば、清掃イベントは、「はだしのコンサート」としてうまく演出され、参加者が楽しみながら漂着ゴミに関心を持つ仕組みになっている。

このように、地域が自主性を保ちながら、地域外から来るよそ者とうまく連携する「自律的な依存」が新たなスタイルとしてお手本にできるのではないか。その際に必要なのは、何より全体をコーディネートする力だろう。個々のパーツでは島の外に頼つてもいいし、助けてもらつてもいいが、全体を島側でまとめられるならば、上手によそ者を使えるはずだ。そして、それはよそ者にとっても楽しく、メリットがある。



数田麻実 (しきだあさみ) 金沢工業大学 情報フロンティア学部 情報マネジメント学科教授。1960年、石川県加賀市生まれ。高知大学農学部栽培漁業学科卒業後、石川県水産課に勤務。その間オーストラリアのジェイムスクック大学大学院、金沢大学大学院博士課程修了。1998年石川県庁を退職し、金沢工業大学へ。専門は沿岸域管理学、エコシステムマネジメント、エコツーリズムなど環境保全の仕組みづくりの研究。E-mail: shikida@neptune.kanazawa-it.ac.jp